

Agit883 は 1969 年から 1972 年にベルリンの左翼のうち非教条主義的で急進的な活動家の間で

読まれた雑誌であり⁶⁾、事件後にはこの *Agit883* に事件についての記事が複数掲載された。本稿はユダヤコミュニティセンターでの事件を考察するにあたって、主に *Agit883* 上のトゥパマロス・西ベルリンや中心メンバーのディーター・クンツェルマンが事件について書いた記事を取り上げる。

この事件を研究対象とした先行研究にはヴォルフガング・クラウスハーの *Die Bombe im jüdischen Gemeindehaus*⁷⁾ がある。また、クスト・アントレーゼン *Agit883: Bewegung, Revolte, Underground in Westberlin 1969–1972*⁸⁾ で *Agit883* 上のパレスチナ問題関係の記事を追っている。これらの研究は、トゥパマロス・西ベルリンやクンツェルマンが事件について書いた記事の中の「ユダヤ人障害」(Judenknax) という語に注目し、これがイスラエル批判の妨げとなるタブーないし「罪悪感コンプレックス」を西ドイツ左翼は捨てなければならないという彼らの主張であると理解する。これらの研究では、クンツェルマンたちの反シオニズムにおける反ユダヤ主義がこのことを念頭に置いて分析されている。

これに対して本稿ではクンツェルマンたちの「私たちの闘争」という主張により多く光をあて、これを通してその反・反ユダヤ主義をめぐる問題意識を考察する。反シオニズムと反ユダヤ主義の分水嶺は何か、反シオニズムはどこから反ユダヤ主義になるのかといった問題は非常に重要なテーマだが、今回は立ち入らない⁹⁾。もちろんユダヤコミュニティセンターでの事件はナチの犠牲者を冒涇するだけでなく在西ベルリン・西ドイツユダヤ人の生活をも脅かす反ユダヤ主義的なものである。しかしこのことだけでは、事件の全体像を捉えきれない。「ユダヤ人障害」という文言を「私たちの闘争」の文脈に置き直すことで、ユダヤコミュニティセンターでの事件から、西ドイツでパレスチナ連帯はいかに行われるべきかというクンツェルマンたちの問題意識が浮かび上がってくる。

第2章では事件の背景と反響について記述する。第3章、第4章ではユダヤコミュニティセンターでの事件がクンツェルマンたちの主張する「私たちの闘争」を示すものだという観点から *Agit883* 上の記事を読む。第3章は「私たちの闘争」の第三世界闘争という側面について確認する。第4章は「私たちの闘争」を西ドイツの反・反ユダヤ主義をめぐる問題意識という側面から論じる。第5章ではこの事件から何が考えられるのか展望をまじえて総括する。

第2章 事件の背景と反響

学生運動は、左翼運動家やキリスト者、平和主義者からなるイースター行進運動および一部の個別労働組合も加わった非常事態法反対運動などとともにAPO(議会外反対派)を構成し、そのなかでも牽引役といって良い立場にあった¹⁰⁾。

1966年末のCDU/CSU(キリスト教民主同盟/キリスト教社会同盟)とSPD(社会民主党)の大連立政権発足に伴う実質的な野党不在状態に対処するべく結成されたAPOは、戦後民主主義体制の形骸化と政治社会における権威主義の蔓延に対して抗議した。そこで掲げられたテーマ

は大学改革推進、極右政党の議会進出阻止、非常事態法の成立阻止、ベトナム反戦と多岐に渡った¹¹⁾。

1968年5月に非常事態法成立阻止を目標として最後の大きな盛り上がりを見せたAPOは、非常事態法が連邦議会で採択されると労働組合の大半が離脱するなど、分裂し始める。それにともなう学生運動も勢いを弱めていった。APOは私生活への退却、「制度の中への長征¹²⁾」、新左翼の各グループ¹³⁾の結成、そして暴力での革命を目指したテロ組織の結成の四つの流れに分かれていく。こうしたテロ組織の代表的存在はRAF（赤軍派）だが、1969年11月にユダヤコミュニティセンターの事件を起こしたトゥパマロス・西ベルリンは、それ以前に活動していた¹⁴⁾。

トゥパマロス・西ベルリンは1969年にクンツェルマン¹⁵⁾によって結成された。クンツェルマンたちのグループはそれ以前彷徨うハシシュ反乱者中央委員会と名乗っていた¹⁶⁾。

1969年の秋にクンツェルマンたち彷徨うハシシュ反乱者中央委員会はヨルダンに滞在していた。そこでクンツェルマンたちはファタハの訓練キャンプに参加してゲリラ戦闘と爆弾製造について説明を受けた他、ヤーセル・アラファートに会った。10月末に、彷徨うハシシュ反乱者中央委員会はベルリンに戻り、前述のようにトゥパマロス・西ベルリンとグループ名を変えた¹⁷⁾。このすぐ後にトゥパマロス・西ベルリンは事件を起こす。

1969年11月9日に西ベルリンのユダヤコミュニティセンターでは、1938年同日の「クリスタルナハト」の犠牲者追悼式典が行われていた。トゥパマロス・西ベルリンが行ったのは、この式典に合わせてユダヤコミュニティセンターに爆発物を置くということだった。後にトゥパマロス・西ベルリンメンバーのアルベルト・フィヒターが述べた言葉によると、クンツェルマンが計画を立て、アルベルト・フィヒターがこれを実行した。クンツェルマンは、捜査当局から有力な容疑者の一人とみなされていた。これは事件で使われた爆弾が1969年3月5日のコミュニンIの家宅捜索で発見されたものと構造上似ているということからだった。クンツェルマンはコミュニンIメンバーだったうえ、長期間姿を消していた¹⁸⁾。

「シャロームとナパーム」というタイトルのビラは爆弾が焼夷弾であることも含めて詳しい犯行状況に言及している。このビラの末尾にはトゥパマロス・西ベルリンの署名があった。ビラが式典の当日にRC¹⁹⁾（共和主義クラブ）に並べてあったことがわかったため警察の目はRCに向かった。RCでは家宅捜索のうえタイプライターなどが押収され、さらに速記タイピストが逮捕された²⁰⁾。

事件は社会全体で注目を集めた。発見当日に爆弾は爆発物用のトレーラーでユダヤコミュニティセンターから搬出されたが、市の中心部から搬出先までの通りを全て通行禁止にして警察が警備するという厳戒態勢での作業は一大センセーションを引き起こした。事件の翌日に行われた爆弾の信管を外す作業は自由ベルリン放送の番組「アーベントシャウ」で放送された。また、事件の解明に対してかけられた賞金は最終的に2万マルクとなり、これに対して短期間で100を超える手がかりが寄せられた。ジャーナリズムは俳優をはじめとした著名人に事件に対する態度表明を求めた。ベルリンの新聞は全て、ユダヤコミュニティセンターでの事件について第一面で報

じた。シュプリンガー社系列の大衆紙は爆弾の出どころや動機について推測をもとに記事にした。全国紙や雑誌でも報道され、数日間から数週間、事件は大きな話題であり続けた。後日、実際に事件で使われた爆弾を複製したものが報道陣の前で爆破された。この時の測定では、粉々になった部品が秒速3.5キロメートルの爆速で飛ばされた。もし爆弾が実際に爆発していたら、建物が破壊されただけでなく式典の出席者から多くの犠牲者が出ていたとされる。事件で使われた爆弾は、簡易な作りであるとはいえ危険性においてより高度な技術で製造された爆薬に劣らないという。爆破の様子は、ユダヤコミュニティセンターに置かれた爆弾の危険性を多くの視聴者に示すべく、「アーベントシャウ」で放送された²¹⁾。

第3章 「私たちの闘争」—— 学生新左翼の第三世界への共感から

第3章、第4章では、クンツェルマンやトゥパマロス・西ベルリンの「私たちの闘争」という主張に着目して、西ドイツ社会でユダヤコミュニティセンターでの事件がどのような意味を持ったのかを考察する。

11月27日の *Agit883* の42号にはクンツェルマンが執筆した「アンマンからの手紙」という記事が掲載されている。クンツェルマンは1970年にも「アンマンからの手紙」という題名で寄稿しているため、それぞれ1969年の記事を「アンマンからの手紙1」、1970年の記事を「アンマンからの手紙2」として区別する。

ヨルダンでファタハのキャンプを目にしていたクンツェルマンはこの「アンマンからの手紙1」の中で、パレスチナ人が闘争を通じて革命的な自覚を得ていく様子から受けた好ましい印象に触れている。しかしこの後でクンツェルマンは、「私は自分たちがパレスチナ人の闘争に完全に同一化するとは思わない。イスラエル人は私の家を爆破したのではなかった。私は難民キャンプで生まれたのではない」と続ける。一見、クンツェルマンが連帯しているはずのパレスチナ人から距離をおいているかのように見えるこの箇所こそ、クンツェルマンの「私たちの闘争」に対するこだわりが現れている。クンツェルマンは「中東でかつての、そして今の第三帝国とその帰結に対する闘争を始めたファタハとの明白な連帯」を読者に促し、その「連帯」とは「私たちの闘争に着手する」ことであると断言した。さらにクンツェルマンは同じ「アンマンからの手紙1」で、GUPS²²⁾ (パレスチナ学生連合) がドイツで行っている活動を「私たちがすぐに引き受けなくてはならない」と主張する。GUPSのドイツでの立場は「招かれざる外国人」であり、その活動の場は本来パレスチナの最前線であるのだという²³⁾。

「ドイツの産業界と連邦政府によるイスラエルへの直接的支援を粉碎しよう。パレスチナ革命の勝利を準備し、世界帝国主義の新たな敗北を推し進めよう。同時に民主主義の外套を着たファシストに対する私たちの闘争を拡大し、大都市における革命的解放戦線の構築に取りかろう。闘争を村から都市へもたらせ！全ての政治的な力は銃から来る。」この「シャロームとナパーム」の末尾部分は、ドイツでの「私たちの闘争」の意味するところがパレスチナ解放闘争の波及

を射程に入れた西ドイツでの反帝国主義・反ファシズム活動だということを端的に示す²⁴⁾。前章で触れたビラ「シャロームとナパーム」は11月13日に *Agit883* の40号に掲載された。学生新左翼の第三世界への共感という文脈を無視して「私たちの闘争」を考えることはできない。

1967年6月にパレスチナ問題が課題として認識されるのに先立って学生運動ではベトナム反戦運動が行われていた。ベトナム戦争の反対論拠は1966年5月の「ベトナム 事例の分析」会議でヒューマニズム的なものからよりマルクス主義的な分析によるものへと変化し、1967年8月の時点で議論の対象はベトナムの事例にとどまらず第三世界と高度産業国家の大都市との関係というより一般的な問題にまで広がった。1968年2月17、18日に開催された国際ベトナム会議²⁵⁾では、「ベトナム革命」、「ラテンアメリカとベトナム革命」、「資本主義国家における反帝国主義者と反資本主義者の闘争」というテーマで議論が行われた。このように学生運動においてベトナム戦争をめぐる抗議運動が展開されるなかで、「ベトナム」は植民地主義的・帝国主義的抑圧に抵抗する第三世界を代表ないし象徴するものとなっていった。学生新左翼の考える「闘争」は資本主義の周縁から中心へ、発展途上国から先進国へともたらされようとしていると構想された。資本主義国家内での闘争という視点はそのなかで浮上した²⁶⁾。

トゥパマロス・西ベルリンによれば、彼らはユダヤコミュニティセンターでの事件についてアジ演説で取り上げようとしていたが演説用の録音テープが隠されたため事件についての議論は実現しなかった。*Agit883* 編集部は内容には賛成できない旨の序文をつけた上で、これを他の2つの文章とともに「無邪気なアナーキズム」という題名で掲載した。トゥパマロス・西ベルリンのアジ演説自体は無題だが、本稿では「無邪気なアナーキズム——2²⁷⁾」とする。この「無邪気なアナーキズム——2」には「ベトコンはアメリカに火をつけた！ファタハはヨーロッパに火をつける！²⁸⁾」という記述がある。トゥパマロス・西ベルリンはベトナムに引き続いて第三世界解放闘争の場となるのはパレスチナだと主張していた。「シャロームとナパーム」では「4年前アメリカ合衆国とヨーロッパの大都市における左翼運動は、こぞってベトナム人の反帝国主義的民族解放闘争と連帯し始めた。今日、アメリカ軍の最終的かつ完全な敗北の直前に、何百万ものアメリカ市民が左翼と一緒に戦争の終結のため、そしてそれと同時に解放戦線の勝利のためにデモ行進をする」と、ベトナム反戦運動での連帯が成功裡に進んでいることを評価した後で、「しかし、ベトナムでの戦争の勝利のうちに終わった結末は、あらゆる戦線でのベトナム戦争の始まりである。帝国主義はその全ての力を中東へ投入して次の決定的な敗北を阻止しようとする」と続けている²⁹⁾。ベトナムがアメリカを変えたようにこれからはパレスチナがドイツとヨーロッパを変えようとクンツェルマンたちは考えた。「アンマンからの手紙1」でクンツェルマンは「一つ確実なのは、ドイツ連邦共和国とヨーロッパにとってパレスチナとはアメリカ人にとってのベトナムであるということだ³⁰⁾」と断言するが、ここからはパレスチナ問題に取り組むことがドイツやヨーロッパにとって特別な課題だというクンツェルマンたちの認識がうかがえる。

「シャロームとナパーム」はシオニズムのイスラエルと西側世界の軍事的結びつきを指摘している。そこでは「ベトナムでの経験を持つ数千人のアメリカの専門家がすでにイスラエル軍で軍

事顧問として働いている」ことや、「ゴルダ・メイヤが西側世界を訪れファントム、ドル、ナパームとともに帰国する」ことが挙げられている³¹⁾。また、「無邪気なアナーキズム——2」に第三次中東戦争の際「シオニストはドイツ・アメリカ製の戦車で新たにまとまった土地をかすめとる」という記述や、「シオニストはファントムをニクソンのところで買う」という記述がある³²⁾。西側世界から供与された武器を使って「人種主義的でシオニストのイスラエル」は「アラブ地域全体で世界の警察官の石油利権を守る」とトゥパマロス・西ベルリンは主張する³³⁾。

クンツェルマンたちトゥパマロス・西ベルリンは、パレスチナ問題に西側帝国主義対第三世界という構図を見て第三世界側に正当性を認めていた。「シャロームとナパーム」の記述では、パレスチナ民衆は「50年以上前から独立を求めて戦って」て、第三次中東戦争における「イスラエルによるファッショ的な侵略出兵」は「あらゆるパレスチナ人とアラブ人」に「帝国主義は長く続く武装革命的民族闘争を通じて克服しようとされなければならない」ということを示したという³⁴⁾。

こうした事実関係の理解を背景にトゥパマロス・西ベルリンは西ドイツの産業界と連邦政府による「イスラエルへの直接的支援」の「粉碎」に言及していた。そしてこれはクンツェルマンたちが「私たちの闘争」で構想していることの柱をなしていると言える。

クンツェルマンが再び「アンマンからの手紙」という題名で寄稿したのは、事件から5か月ほどたった1970年4月3日である。クンツェルマンの「私たちの闘争」という主張は「アンマンからの手紙1」から一貫していた。クンツェルマンは「いったいつ君たちのところで聖域のイスラエルに対する組織化された闘争が始まるのか？いつ私たちは戦うパレスチナ民衆を実践的なインターナショナルイズムによって解放するのか？」と「アンマンから」問い、それから「逮捕されたパレスチナ人の解放、ドイツユダヤ人へのアジテーション、イスラエルへの移住に対する闘争——いまだかつて私たちは民族解放闘争を直接支援することで自分自身の国での革命を前進させるこのような機会を持たなかった」と付け加えている³⁵⁾。ここに現れたのはパレスチナでの解放闘争とドイツでの革命運動は両輪をなして進められなければならないというクンツェルマンの確信だった。

第4章 「私たちの闘争」

—— トゥパマロス・西ベルリンの反・反ユダヤ主義をめぐる問題意識

前節では「私たちの闘争」の第三世界の解放闘争との連帯という側面を確認した。「アンマンからの手紙1」の「ドイツ連邦共和国とヨーロッパにとってパレスチナとはアメリカ人にとってのベトナム」であるという箇所には、ベトナムがアメリカを変えたように今度はパレスチナがドイツやヨーロッパを変えることができるはずだというクンツェルマンたちの期待が現れている。しかし、クンツェルマンたちトゥパマロス・西ベルリンのパレスチナへの思い入れは何なのか、彼らはなぜラテンアメリカなどではなくパレスチナこそがベトナムの次に取り組むべき課題だと

考えたのかといった疑問については第三世界から欧米へと闘争が波及するという学生新左翼の構想だけでは説明しきれない。この節ではクンツェルマンたちの主張する「私たちの闘争」をナチの過去との取り組みという視点から読み直す。このため西ドイツの公的規範としての反・反ユダヤ主義が問題となる。

クンツェルマンたちトゥバマロス・西ベルリンの反・反ユダヤ主義をめぐる問題意識は「ユダヤ人障害」という表現に現れた。「アンマンからの手紙1」では上の箇所後に「左翼はこのことをまだ理解していなかった。なぜか？ユダヤ人障害のためである。『私たちは600万人のユダヤ人を毒ガスで殺害した。ユダヤ人は今日イスラエル人と言われている。ファシズムと戦う者は、イスラエルの側に立つ。』これはそんなに単純であり、しかし何もかも間違っている……」と続く³⁶⁾。このようにクンツェルマンはホロコーストの過去が西ドイツの対イスラエル姿勢を規定していることを指摘する。これについて議論するためにはまず、かつて学生運動が西ドイツ社会の過去との取り組みのあり方を問題視し、反・反ユダヤ主義を表面的なものにしないように努めてきたことを確認する必要がある。

第三帝国の継承国家として西側自由主義陣営内での信頼回復が喫緊の課題だった西ドイツでは初代首相アデナウアー主導のもとでナチの過去と決別したことが示された³⁷⁾。1952年9月10日に調印されたルクセンブルク補償協定³⁸⁾はその一環と言える。これにより西ドイツは総額30億マルクを十数年かけてイスラエルに物資で支払うことになった。しかし、占領下の非ナチ化の過程で公職追放された元ナチ党員のほとんどが西ドイツ建国の際に復職するといったようにその過去の清算は不十分なものだった³⁹⁾。

そのなかでナチの過去と向き合うことに重きをおいたのは学生運動を含めた左派だった。ルクセンブルク補償協定は与党内部で反発が強く、批准には野党SPD全員の賛成が欠かせなかった。1957年にベルリン自由大学ではSDSの学生たちがヘルムート・ゴルヴィッツァー教授とともにDIS（ドイツ・イスラエルスタディグループ）を設立した。ここで学生たちは、ドイツ人とユダヤ人がユダヤ人600万人の殺害を経て和解すること、反ユダヤ主義と闘うこと、イスラエルの承認を主な課題としている⁴⁰⁾。学生運動は西側資本主義陣営での復興・繁栄に安住する親世代に対し「ナチ時代にあなたたちは何をしていたのか」と抗議していた。彼らにはナチの台頭を許しながら何事もなかったかのようにすごすことなど理解できなかった。このとき学生たちは連邦共和国にナチ時代との連続性を見出していた⁴¹⁾。

Die Zeit に寄稿された「ユダヤ人の友——ユダヤ人の敵。連邦共和国の怪しげな親ユダヤ主義」という記事は西ドイツ社会で反・反ユダヤ主義が皮相なものにとどまっている現実を認識していた。西ドイツとイスラエルの間で国交が樹立された1965年にこの記事は、反ユダヤ主義と類似のメカニズムをもつ親ユダヤ主義が西ドイツに民主主義が定着したことを示す手段として機能していると指摘した⁴²⁾。西ドイツ社会一般では1967年6月の第三次中東戦争が起きると同時にイスラエルへの寄付や義勇兵の志願といった形で急速に親イスラエル風潮が高まりを見せる。かつて、市民的な生活・労働倫理に基づいて、ユダヤ人に「寄生」イメージを結びつけるステレオ

タイプは反ユダヤ主義のイデオロギーを支えていた。この価値観を残したまま、西ドイツ社会は規律がありよく訓練され士気の高いイスラエル軍に自らの理想を重ね合わせたのだった。イスラエル国防相のモシェ・ダヤンにはヒトラー暗殺計画に関わったシュタウフェンベルクが投影され、もてはやされた⁴³⁾。一方それまで親イスラエ尔的だった学生新左翼は、社会全体の流れに逆らうかのように1967年6月からイスラエル批判を始めた。こうした批判が左翼反ユダヤ主義によるものだと周囲からみなされると、SDSでは西ドイツの親ユダヤ主義に支えられた親イスラエル傾向は反ユダヤ主義と共通の基盤を持つという内容の反論をしている⁴⁴⁾。

反・反ユダヤ主義つまり「反ユダヤ主義でないこと」とはイスラエルを批判しないことなのか。もしイスラエルの理念や政策にファシズムや人種主義があると認められた場合イスラエルを批判することは許されるのか。こうした反・反ユダヤ主義に対する認識は対イスラエル姿勢のあり方を左右する。クンツェルマンたちトゥパマロス・西ベルリンは親ユダヤ主義とシオニズムの結びつきにファシズムの影を見出して指摘した。

「シャロームとナパーム」と「無邪気なアナーキズム——2」はともに、西ドイツの過去を克服するための「数十億」マルクになる補償が「新しいファシズム」つまりシオニズムへの財政支援を「カモフラージュ」していると指摘する⁴⁵⁾。このような状態は「シャロームとナパーム」では「ユダヤ人に対するファシズムの残虐行為の克服というやましい口実の下で西ドイツはイスラエルによるパレスチナアラブ人に対するファシズム的残虐行為に決定的に力を貸している」と表現されている⁴⁶⁾。

トゥパマロス・西ベルリンは、シオニズムを「新しいファシズム」だととらえ、ナチ時代のファシズムが克服されているかどうかはこの「新しいファシズム」に対する態度に自ずと現れると考えていた。この立場から彼らは事件に対する西ドイツ社会の反応に不信感を表明する。第2章で触れたように、1969年11月のユダヤコミュニティセンターでの事件後、ジャーナリズムを中心に連日の騒ぎとなっていた。

このユダヤコミュニティセンターでの事件後の左翼を含めたベルリンの動揺・反応をふまえて、「無邪気なアナーキズム——2」では、「シュプリングー、市政府、ガリンスキーたちは私たちに彼らのユダヤ人障害を売ろうとする」というトゥパマロス・西ベルリンの認識が示される。彼らは売り物にされたユダヤ人障害を端的に表すものとして、「アウシュヴィッツのガス室から逃れた人々は、私たちのもとで平和を見出さなくてはならない。というのはそうであれば私たちの良心が皆苛まれるのを余儀なくされ、私たちには恥ずかしさの他は何も残らないから」という*Berliner Morgenpost*の記事の一節を引用した。このような「ファシズム独裁の25年後に」なつてにわかに行われる過去の克服はトゥパマロス・西ベルリンにとっては「もはや遅すぎる」のだという。「ゲオルク・エルザー一人を除いて全ての人々が当時積極的にかかわった」背景がある以上「老人の中でそのほかに誰も私たちに何か言う権利はない。」このようにトゥパマロス・西ベルリンは断罪する。ユダヤ人障害について「その商売に私たちは加わらない」と宣言するトゥパマロス・西ベルリンにとっては「どこに爆弾を置いているのか」は「とっくにわかっている」

ことだった⁴⁷⁾。

ナチの過去の克服が「遅すぎる」という表現には、すでに取り返しのつかない帰結をもたらしたかつてのファシズムに対しての反省はその埋め合わせをしようとするよりも今問題となっているファシズムを防ぐことで表明されるべきだという彼らの立場が反映されている。

ユダヤコミュニティセンターで事件があった後、事件の動機は反ユダヤ主義であると推測する記事が出ていた。*Agit883* 編集部による記事「いかに報道が爆弾に装薬するか」は事件が「警察、司法、ジャーナリズムに住民の反ユダヤ主義コンプレックスを利用するという左翼をより厳しく中傷するための機会を与えた⁴⁸⁾」と評したが、それはこうした状況を受けたものである。

このようななかで「クリスタルナハト」犠牲者追悼式典を行うユダヤコミュニティセンターに爆弾が置かれたという事件を弁護すること、まして支持することは、反シオニズムを唱える学生新左翼の間でも抵抗のあることだったと考えられる⁴⁹⁾。パレスチナ委員会⁵⁰⁾が11月20日に*Agit883*の41号に発表した記事「反ユダヤ主義とは何か」には「ナチのドイツでは民族全体が大量虐殺された。この民族の大量虐殺犯とその共犯者は今日親ユダヤ主義的イデオロギーを手に入れイスラエルの攻撃的なシオニズムの主な支えになった」と、また「シオニズムの特徴は小市民的な反ユダヤ主義の継承である」とあり、シオニズムと親ユダヤ主義、反ユダヤ主義の関係についてクンツェルマンたちと同様の指摘がされている。しかしこれらのわずかな言及を除いて記事はほとんどユダヤ人迫害を階級対立という側面から解釈する歴史叙述に終始し、事件の背景にある反シオニズムが反ユダヤ主義とは別物であるという記事の立場はここでは論証されていない⁵¹⁾。また、フランクフルトパレスチナ委員会がSC-infoに寄稿した声明には確かに親ユダヤ主義への批判的な言及⁵²⁾がある。しかしこの声明は事件には同調せず、「ディアスポラのユダヤ人はベルリンのコミュニティセンターに対するもののようなテロ行動をユダヤ人としての彼らの迫害と絶滅の背景でしか理解できない。確かにユダヤ人コミュニティは莫大な資金の流れが必要なシオニスト国家への資金調達を中心でもある。それにもかかわらずユダヤ人の施設のシオニズムの基盤との同一視はそれ自体人種主義的なものであって、それは人種主義的な国家を強めこそすれ弱めはしない。……爆弾による暗殺計画、ファシズムの犠牲者の記念碑でのスローガンとそれらの正当化は客観的には挑発である。運動内部で私たちはそのような行動と戦わなければならない。もし私たちのところでインターナショナリズムが歴史を無視した道徳主義に終わるべきでないのなら」と、学生運動内部での過去の克服が不可欠だと主張している⁵³⁾。

事件に対する支持表明が新左翼から出ないことに対してクンツェルマンとトゥバマロス・西ベルリンは不満を感じていた。「アンマンからの手紙1」は、このような状況を「パレスチナ委員会という政治的見せかけが爆弾による好機をキャンペーンを始めるのに活かさなかったことは、その政治的活動ではないまったく理論的な面ばかりを、またあらゆる問題提起におけるユダヤ人コンプレックスの優位を示している」と批判している⁵⁴⁾。

西ドイツ学生新左翼からの賛同が得られないのはホロコーストの過去が彼らに踏み込んだ反シオニズムをためらわせるからだとクンツェルマンたちは考えた。こうした考えが「シャロームと

ナパーム」でも示されているのは以下に示す通りである。「これまで中東紛争を論じる際に左翼が理論的麻痺状態で何もしないことは、ドイツ人の罪悪感の産物である。『何しろ私たちはユダヤ人を毒ガスで殺害した。私たちはユダヤ人を新しいジェノサイドから守らなくてはならない。』ノイローゼの歴史主義者がイスラエルという国家に歴史的な正当性がないことを検証したところで、それはこの無力な反ファシズムの克服につながらない。真の反ファシズムとは戦うフェダイーンとの明確かつ明白な連帯である。」文章はシオニズムは「新しいファシズム」であるという主張のもと次のように続く。「私たちの連帯はもはやベトナムのように言葉による抽象的な啓蒙方法に満足しまい。そうではなく、シオニズムのイスラエルのファシズムのドイツ連邦共和国との緊密な関係を具体的な行動によって容赦なく打ち砕く。西ベルリン、ドイツ連邦共和国内のあらゆる記念式典は、1938年のクリスタルナハトが今日日々シオニストによって占領地で、難民キャンプで、イスラエルの刑務所で繰り返されていることを隠蔽する。ファシズムに追放されたユダヤ人自身がアメリカ資本と協力してパレスチナ民衆を抹殺しようとするファシストになった⁵⁵⁾。」

西ドイツに反・反ユダヤ主義というユダヤ人に対する差別と偏見を拒絶する公的規範があることはすでに述べた。ナチの過去を克服し民主主義の根付いたことを常に示さなければならない西ドイツではこの規範からの逸脱は許されないことだった。このようななか親ユダヤ主義は反・反ユダヤ主義の代わりとして機能した。たとえば元ナチ党員・協力者の過去の清算が不十分であっても、親ユダヤ主義的な言動によってこの厳格な反・反ユダヤ主義という規範をかいくぐることができた⁵⁶⁾。一方で親ユダヤ主義的でない言動はどのようなものであれ反ユダヤ主義とみなされる可能性があった。イスラエルに対する支持表明や批判は常にこの枠内にあった。クンツェルマンたちの主張するところでは、イスラエルへの軍事支援や補償、ナチ犯罪の犠牲者の追悼式典、反シオニズム・イスラエル批判の抑制など、政府や財界、学生運動、一般社会の様々な位相でこの親ユダヤ主義は影響を及ぼし、場合によっては行動を制限する強制力を持った。

このようなことが、クンツェルマンたちが問題にする「ユダヤ人障害」の指すものであると考えられる。反・反ユダヤ主義は期待されたものとは異なる方向へ変質し、クンツェルマンたちがナチ時代のファシズムの克服よりも優先させる「新しいファシズム」に対する抵抗を困難にした。「私たちがようやく『シオニズム』というファッショ的なイデオロギーを理解することを覚えたとき、私たちはもはや、私たちの単純な親ユダヤ主義をファタハとの明白な連帯と取り替えるのをためらわない⁵⁷⁾」と言うクンツェルマン、そしてトゥパマロス・西ベルリンにとって「ユダヤ人障害」はパレスチナとの連帯の妨げとなるものであり、取り除かれることが望ましいものだった。

以上をふまえて、クンツェルマンたちが必要性を強く訴えたドイツでの「私たちの闘争」というものに改めて注目する。前章ではドイツでの「私たちの闘争」に、第三世界の解放闘争を先進国にもたらすことという第一義的な意味を確認したが、この「私たちの闘争」はそれ以上の意味を帯びてくる。ベトナムの次に取り組むべき第三世界解放闘争はパレスチナであり、しかもそれ

はドイツとヨーロッパにとって特別な課題だという彼らのパレスチナへのこだわりは、パレスチナ連帯についてまわる「ユダヤ人障害」という彼らの問題意識から説明できる。クンツェルマンたちが主張するドイツでの「私たちの闘争」とは、この「ユダヤ人障害」を意識の外に追いやることだと言ってよい。

第5章 結論

本稿の問題関心は、「クリスタルナハト」の犠牲者追悼式典に合わせて爆弾が置かれたという1969年11月のユダヤコミュニティセンターでの事件から何が考えられるのかというものである。

クンツェルマンは「アンマンからの手紙2」で武装グループの活動が「もっぱら階級の敵に対して、ブルジョワジーの組織とそのエージェントに対してのみ向けられる」ものでなければならぬという考えを明らかにしている。しかも、ミュンヘンのユダヤ教教区の火事に巻き込まれて死亡した老人ホームの入居者のことを「罪のない7人の年金生活者」と表現している。その一方でクンツェルマンは『反シオニズムは反ユダヤ主義である』はガリンスキーたちとシュプリンガーの手先による狡猾な嘘である。この命題を受け入れる人は誰でも帝国主義的な立場を代表し、それでもってどの左翼にとっても階級の敵となる」と言い切る⁵⁸⁾。このことから、クンツェルマンたちが専らユダヤ人を標的にしてユダヤコミュニティセンターの事件を起こしたのではないことがうかがえる。

ユダヤコミュニティセンターでの事件はクンツェルマンたちトゥバマロス・西ベルリンにとって、「私たちの闘争」だったと言ってよいだろう。

言うまでもなく、「私たちの闘争」の第一義的な意味は第三世界闘争の波及を視野に入れた西ドイツでの運動である。パレスチナとの連帯を表明するクンツェルマンたちはパレスチナ解放闘争とドイツでの「私たちの闘争」を連携させる必要を強く主張した。学生新左翼には第三世界の解放闘争を欧米の大都市にもたらすという構想があった。また、「私たちの闘争」を主張するクンツェルマンたちには、パレスチナ人と境遇や経験を異にする西ドイツ新左翼がパレスチナ解放闘争と連帯するとき、それは彼らの闘争と全く同じものであるはずはなく、西ドイツ社会内部に西ドイツ新左翼の解くべき課題が自分たちの「持ち場」として存在するという意識があった。この「私たちの闘争」という主張は西ドイツ社会のあり方を問うものでもあった。過去の清算が置き去りにされたまま、反・反ユダヤ主義が親ユダヤ主義といううわべでよしとされていることはしばしば指摘されてきた。その親ユダヤ主義のために反シオニズムという「新しいファシズム」に対する抵抗が押さえつけられることをクンツェルマンたちは問題視した。「西ベルリン、ドイツ連邦共和国内のあらゆる記念式典は、1938年のクリスタルナハトが今日日々シオニストによって占領地で、難民キャンプで、イスラエルの刑務所で繰り返されていることを隠蔽する」と言うトゥバマロス・西ベルリンにとってユダヤコミュニティセンターでの犠牲者追悼式典は、そうした欺瞞を象徴するものだった。ユダヤコミュニティセンターでの事件には「ユダヤ人障害」

の意識からの追放というクンツェルマンたちの主張が反映されていた。なぜこの事件が例えばイスラエルなどではなくて西ドイツで、それもユダヤコミュニティセンターで起こされたのかという疑問はここで説明されるのである。

反シオニズムは反ユダヤ主義なのか、あるいは反シオニズムはどこから反ユダヤ主義になるのかといった議論に本稿では立ち入らなかった。これについては以下で展望を示す中で触れるにとどめ、今後の課題として残す。クラウスハーは、反シオニズムを根拠に行われるイスラエル攻撃に反ユダヤ主義との連続性を見てとるジャン・アメリーの議論を紹介している。アメリーは反イスラエルや反シオニズムの中に含まれている反ユダヤ主義を「雲の中の雷雨」(das Gewitter in der Wolke)に例える⁵⁹⁾。ナチ時代のファシズムを反省しているのなら今眼前にあるファシズムを阻止することでそれを示せというクンツェルマンたちの発想からは、たとえ今のファシズムを阻止できたとしてもそれで昔のファシズムが自動的に清算されたことにはならないという点が抜け落ちている。二次的反ユダヤ主義⁶⁰⁾であれ親世代から受け継がれた反ユダヤ主義であれ、ここには十分に存在する余地がある。そしてこうしたことはトゥバマロス・西ベルリンのように武装闘争を標榜する運動に限ったことではない。

反シオニズムに反ユダヤ主義が紛れ込んでいるという指摘があったとき、それは単なる過敏な反応として片付けられるものでもなく反シオニズムそのものに正当性がないのでもない。問題となるのはむしろそれだけ西ドイツの反・反ユダヤ主義に説得力がないということだろう。こうした西ドイツの反・反ユダヤ主義の機能不全を、ユダヤコミュニティセンターでの事件は浮き彫りにした。もちろんこれには反・反ユダヤ主義からの決定的逸脱という大きすぎる代償がともなっている。

これらをふまえたうえで、クンツェルマンたちの主張から離れて「私たちの闘争」の自分たちの「持ち場」ないし西ドイツ新左翼の解くべき課題という点だけに注目する。反・反ユダヤ主義の内実が問われなければならない以上西ドイツ社会にはパレスチナを論じるための前提が十分に整っていないといえる。反・反ユダヤ主義の代替としての親ユダヤ主義があらゆるイスラエル批判や反シオニズムを抑え込むこと、そして一方でこれを指摘するものには反ユダヤ主義への傾きがあることはパレスチナ問題を扱うときに避けては通れない課題として顕在化する。西ドイツ社会に内在するこの問題が取り組まれるとき、当事者となるのはその社会の構成員である。公的規範としての反・反ユダヤ主義の軌道修正を試みることで、つまり西ドイツ社会における反・反ユダヤ主義の現状を意識し、これを公的規範として維持しながらその欠陥を少しずつ修復しようとすることは、パレスチナ問題への取り組みの一端を担うことになる。

注

- 1) 井関正久『戦後ドイツの抗議運動——「成熟した市民社会」への模索』岩波書店、2016年、35-38頁。
- 2) 当時西ドイツ社会では、キージンガー連邦首相が元ナチ黨員であるという事実やまたネオナチ政党のNPD（ドイツ国民民主党）の躍進を受けてナチの過去との取り組みへの関心が高まっていた。井関

前掲書、38-41 頁。

- 3) 石田勇治『『過去の克服』と反ユダヤ主義』梶村太郎他著『ジャーナリズムと歴史認識』凱風社、1999 年、291-293 頁。
- 4) 西ドイツの補償と秘密武器供与に基づくイスラエルとの関係構築は西ドイツの西側統合を後押しするものだったが、両国間に国交はなかった。東ドイツと国交を結ぶ国とは国交を結ばないというハルシュタインドクトリンのもとでは、イスラエルとの外交関係樹立はアラブ諸国による東ドイツ承認を招きかねず、これは西ドイツにとって避けるべきことだった。Hafez, Kai, *Die politische Dimension der Auslandsberichterstattung Band 2: Das Nahost-und Islambild der deutschen überregionalen Presse*, Baden-Baden 2002, S. 146.
- 5) 1967 年の西ドイツ学生新左翼の対イスラエル姿勢の変化については以下の文献を参照。Herf, Jeffrey, *Undeclared Wars with Israel: East Germany and the West German Far Left*, 1967-1989, New York, 2016, pp. 75-88, Kloke, Martin W., *Israel und die deutsche Linke: zur Geschichte eines schwierigen Verhältnisses*, Frankfurt am Main, 1990, S. 68-71, Fichter, Tilman P./Lönnendonker, Siegfward, *Geschichte des SDS: Der Sozialistische Deutsche Studentenbund 1946-1970*, Bielefeld, 2017, S. 181-183.
- 6) Andresen, Knud./Mohr, Markus./Rübner, Hartmut, *Agit883: Bewegung, Revolte, Underground in Westberlin 1969-1972*, Berlin, 2006, S. 9.
- 7) Kraushaar, Wolfgang, *Die Bombe im jüdischen Gemeindehaus*, Hamburg 2005.
- 8) Andresen, a.a.O.
- 9) こうしたテーマを扱ったものとしては例えば次の研究がある。Stein, Timo, *Zwischen Antisemitismus und Israelkritik: Antizionismus in der deutschen Linken*, Wiesbaden, 2011.
- 10) 井関、前掲書、35-38 頁。
- 11) 井関、前掲書、35-38 頁。
- 12) SPD に入党して体制の内側からの改革を目指すこと。西田慎「西ドイツの毛沢東主義新左翼——K グループを例に」、楊海英『中国が世界を動かした「1968」』、藤原書店、2019 年、240 頁。
- 13) 次々と結成された新左翼グループは主に教条主義的新左翼と非教条主義的新左翼の二つの勢力に大別できる。マルクス＝レーニン主義に忠実な前者は K グループと呼ばれ、毛沢東主義の影響を受けていた。後者は APO の反権威主義・無政府主義の流れを汲み党モデルを拒絶していた。西田、前掲論文、242 頁。
- 14) 西田、前掲論文、240 頁、井関、前掲書、77-81 頁。
- 15) クンツェルマンは、SDS の反権威主義派の代表的な存在だったルディ・ドゥチュケと並んで、学生運動家の間で影響力を持っていた。ドゥチュケとクンツェルマンは、破壊活動というアナーキズム色の強い団体にいたが、後に SDS 内で有力となる反権威主義派はその団体のメンバーが中心となって形成された。またクンツェルマンはコミュニン I の結成を実質的に推進した。コミュニン I はさまざまな挑発活動を展開し、マスメディアに大きくとり上げられることで知名度をあげた。ただ、クンツェルマンたちの、許可なく SDS の名を用いてチラシを配布するなどといった行動が SDS 指導部との確執を生み、コミュニン I メンバーは「偽左翼」として SDS から除名される。コミュニン I は、暴力の是非をめぐる意見の相違から分裂し始め、1969 年 11 月に解散した。井関正久「西ドイツにおける抗議運動と暴力——『68 年運動』と左翼テロリズムの関係を中心に」『日本比較政治学会年報』第 9 号、2007 年、179-185 頁。
- 16) 同上、194 頁。
- 17) Reimann, Aribert, 'Letters from Amman: Dieter Kunzelmann and the Origins of German Anti-Zionism during the Late 1960s', in Ingrid Gilcher-Holtey (ed.), *A Revolution of Perception? Consequences and*

- Echoes of 1968*, New York, 2014, pp. 79-82., Enzensberger, Ulrich, *Die Jahre der Kommune I: Berlin 1967-69*, Köln, 2004, pp. 341-351.
- 18) Kraushaar, a.a.O., S. 29-36, S. 248-249, Reimann, Aribert, *Dieter Kunzelmann: Avantgardist, Protestler, Radikaler*, Göttingen, 2009, S. 241. なお、コミュニオン I については注 15 を参照。
 - 19) RC は 1967 年 4 月に設立され、週に 2、3 回、APO の活動内容に沿った講演会や討論会を開催していた。登録メンバーは約 200 人だった。Ebenda, S. 40-45.
 - 20) Ebenda, S. 36-38.
 - 21) Ebenda, S. 30-39.
 - 22) 西ドイツ在住のアラブ人・パレスチナ人学生の組織。PLO の傘下であり、カイロに本部があった。西ドイツで対イスラエル紛争における「戦線」を開くことをその目的としていた。Herf, *opcit.*, pp. 22-23.
 - 23) Kunzelmann, Dieter, 'Brief aus Amman', *Agit883*, Nr. 42, 27.11.1969, <URL=<http://plakat.nadir.org/883/>>.
 - 24) 'Schalom+Napalm', *Agit883*, Nr. 40, 13.11.1969, <URL=<http://plakat.nadir.org/883/>>.
 - 25) 国際ベトナム会議では「世界革命」における暴力の有効性についての議論もなされた。そこでは討論者の多くが南米での革命的解放運動とチェ・ゲバラのゲリラ戦術を評価し、運動における暴力行使は公然と支持された。井関前掲書、43-46 頁。
 - 26) 川崎聡史、「社会主義ドイツ学生同盟 (SDS) の対米認識の変容 — 1960 年代の西ベルリンを中心に —」、『ヨーロッパ研究』(17) 17-28 2017 年、21-23 頁。
 - 27) *Agit883* で 3 つの文章それぞれに番号を振って掲載しているのに応じて本稿では便宜的に題名に「2」をつけた。
 - 28) 'Der naive Anarchismus', *Agit883*, Nr. 41 20. 11. 1969, <URL=<http://plakat.nadir.org/883/>>.
 - 29) 'Schalom+Napalm'.
 - 30) Kunzelmann, Dieter, 'Brief aus Amman', *Agit883*, Nr. 42.
 - 31) 'Schalom+Napalm'.
 - 32) 'Der naive Anarchismus'.
 - 33) 'Schalom+Napalm'.
 - 34) Ebenda.
 - 35) Kunzelmann, Dieter, 'Brief aus Amman', *Agit883*, Nr. 55, 3. 4. 1970, <URL=<http://plakat.nadir.org/883/>>.
 - 36) Kunzelmann, Dieter, 'Brief aus Amman', *Agit883*, Nr. 42.
 - 37) アデナウアーは 1951 年 9 月の国会演説で「人間の尊厳は不可侵である。これを尊重しかつ保護することは、あらゆる国家権力の義務である」という基本法第一条を引いて、連邦政府があらゆる人種差別を拒絶し、国民皆が人間的・宗教的寛容の精神を身につけること、そしてなお反ユダヤ主義的扇動を続けた場合には厳しい刑罰が課されることを表明している。石田、前掲論文、293-295 頁。
 - 38) 西ドイツ・イスラエル間の補償協定と西ドイツ・ユダヤ人対独請求会議間の「議定書」をまとめてルクセンブルク補償協定と呼ばれている。ルクセンブルク補償協定に基づいてイスラエルはドイツから原料、鉄鋼、機械、船舶などを買い付けた。これらの物資はイスラエル国内のインフラ整備に充てられた。この協定では軍需品の購入は禁止されていたが、輸入した鉄鋼などを加工して軍事利用することは可能だった。板橋拓己「ドイツとイスラエルの「和解」——道義と権力政治のはざままで——」『アジア太平洋研究』39 号、2014 年、120-121 頁。
 - 39) 石田、前掲論文、293-297 頁。
 - 40) Fichter, Lönendonker, a.a.O., S. 181.

- 41) 石田、前掲論文、297-301 頁。
- 42) ただし記事を執筆したシュテアリングは、親ユダヤ主義を斥けドイツ人とユダヤ人の関係の「正常化」を求める態度にも問題があることに言及している。Sterling, Eleonore, 'Judenfreunde Judenfeinde. Fragwürdiger Philosemitismus in der Bundesrepublik', *Die Zeit* 10. 12. 1965 <URL=https://www.zeit.de/1965/50/judenfreunde-judenfeinde>.
- 43) 高橋秀寿、「五〇年代～七〇年代の西ドイツにおける反ユダヤ主義——その克服？」『立命館文学』661 号、625-629 頁、2019 年。第三次中東戦争の際ダヤンは「第 2 のロンメル」というように同じくヒトラー暗殺計画に関わったロンメルにもなぞらえられた。Reimann, opcit., pp. 71-75. 第三次中東戦争にともなって盛り上がりを見せるイスラエル支持の雰囲気の中で、*Die Zeit* には「ベルリンはイェルサレムではない：過去の克服としての間違った親ユダヤ主義」という記事が寄稿された。執筆者のヤンセンが懸念したのは、イスラエルの「電撃的勝利」に沸く西ドイツ社会で領土拡張を進めるイスラエルから「東方領土」問題を抱えるドイツが連想されていることだった。Janßen, Karl-Heinz, 'Berlin ist nicht Jerusalem Der falsche Philosemitismus als Vergangenheitsbewältigung', *Die Zeit*, 7. 7. 1967, <URL=http://www.zeit.de/1967/27/berlin-ist-nicht-jerusalem>.
- 44) Herf, opcit., pp. 75-88.
- 45) 'Schalom+Napalm', 'Der naive Anarchismus'.
- 46) 'Schalom+Napalm'.
- 47) 'Der naive Anarchismus'.
- 48) 'Wie die Presse eine Bombe schärft', *Agit883*, Nr. 41, 20.11.1969 <URL=http://plakat.nadir.org/883/>.
- 49) 11 月 13 日に *Agit883* の 40 号に掲載された RC による記事「爆弾——報道声明」は、ユダヤコミュニティセンターでの事件はイスラエルにおけるファシズムを指摘する手段として不適切だという RC の立場を明らかにしている。また 1970 年 2 月 19 日に *Agit883* の 50 号にある「声明」はこの事件で誤認逮捕されたファルカプフスキーによるものである。ファルカプフスキーは事件とは無関係であること、また「イデオロギー上の理由から」事件を嫌悪し、厳しく非難すると強調している。さらにこのことと、報道による中傷のせいで「そうでなければ二度と私のユダヤ人の友人に顔向けできない」ことから自らの APO とのコネクションを利用して捜査に協力する用意があると言う。'Die Bombe: Presseerklärung', *Agit883*, Nr. 40, 13.11.1969, <URL=http://plakat.nadir.org/883/>., Farkasofsky, Willi, 'Erklärung', *Agit883*, Nr. 50, 19.2.1970 <URL=http://plakat.nadir.org/883/>., Andresen, a.a.O., S. 163.
- 50) 1969 年 9 月初めにイスラエル大使のベルリン訪問に対して大規模なデモが行われたとき、ドイツ人、イスラエル人、アラブ人の学生たちはパレスチナ委員会を結成した。パレスチナ委員会は理論的側面からパレスチナ問題の解明に貢献することを目指したが、内部で中東情勢の判断をめぐり意見が合わず、1970 年の 1 月には解散することになった。'Palästina-Problem', *Agit883*, Nr. 30, 4.9.1969, <URL=http://plakat.nadir.org/883/>., Ebenda, S. 159-160.
- 51) 'Was ist Antisemitismus', *Agit883*, Nr. 41 20. 11. 1969, <URL=http://plakat.nadir.org/883/>.
- 52) フランクフルトパレスチナ委員会の声明には「この同一視（ユダヤ機関のシオニズムの基盤との同一視——引用者）はシオニズムの宣伝者によって意識的に構築される。イスラエルという国家へのあらゆる批判を反ユダヤ主義的だと告発するためだけではない。西ドイツで親ユダヤ主義の形のポジティブな人種主義に急変した、ファシズムの野蛮によって生じた罪悪感を感情的な親イスラエルの雰囲気反転させるためでもある。この関係を行動と啓蒙によって打ち破らない者はシュケイリの小市民的人種主義をとっくに粛清したパレスチナ革命を裏切る」という一節がある。'Erklärung zum Bombenattentat auf das jüdische Gemeindehaus in Berlin', SC-info, 22.11.1969, <URL=http://www.trend.infofartisan.net/litlisten/aufuhr/aufuhr25.html>.

- 53) Ebenda.
- 54) Kunzelmann, Dieter, 'Brief aus Amman', *Agit883*, Nr. 42.
- 55) 'Schalom+Napalm'.
- 56) 「一九六〇年代、七〇年代はユダヤ人を重要なポストにつけて、首相や政党党首の横に『お飾り』として座らせておけば、それだけで海外向けの宣伝になると考えられていた」のが、「八〇年代に入る頃には『反・反ユダヤ主義』もしくは『親ユダヤ主義』的な政治規範が浸透し、それに反対するものに対し、政治的・社会的な制裁が加えられることに、市民の同意が得られるようになっていた」という。武井彩佳、『戦後ドイツのユダヤ人』、白水社、2005年、121-138頁。また、ドイツ政府がパレスチナ問題に対する発言や干渉を極力避ける態度については「ユダヤ人に関する否定的な発言を社会的に制裁する『親ユダヤ的』な政治文化において、不用意なイスラエル批判は逆に反ユダヤ主義者のレッテルを貼られる危険を意味し、パレスチナ問題に口をはさむことはドイツの政治家にとっては非常にリスクの高い行為であったのだ」と説明される。武井彩佳『「つぐない」のレアルポリティーク——ドイツの補償とイスラエル』『想起の文化とグローバル市民社会』勉誠出版、2016年、253-256頁。
- 57) Kunzelmann, Dieter, 'Brief aus Amman', *Agit883*, Nr. 42.
- 58) Kunzelmann, Dieter, 'Brief aus Amman', *Agit883*, Nr. 55.
- 59) Kraushaar, a.a.O., S. 79-85.
- 60) 二次的反ユダヤ主義はアウシュヴィッツとナチの過去をめぐるドイツ人とユダヤ人の認識の不一致を背景とした「アウシュヴィッツゆえに生じる反ユダヤ主義」であり、ナチ時代の人種主義的反ユダヤ主義ともそれ以前の宗教的反ユダヤ主義とも区別される。二次的反ユダヤ主義はドイツ人の自尊心を優先してアウシュヴィッツの歴史的意味の読み替えが行われたときや、「過去の克服」が既になされていると考えるドイツ人がユダヤ人の補償要求に対して不快感を表すときなどに見られるという。石田、前掲論文、290-293頁。

参考文献

- 'Palästina-Problem', *Agit883* Nr.30, 4.9.1969,
 〈URL=<http://plakat.nadir.org/883/>〉 最終閲覧日 2019年10月28日
- 'Die Bombe: Presseerklärung', *Agit883* Nr.40, 13.11.1969,
 〈URL=<http://plakat.nadir.org/883/>〉 最終閲覧日 2019年10月28日
- 'Schalom+Napalm', *Agit883* Nr.40, 13.11.1969,
 〈URL=<http://plakat.nadir.org/883/>〉 最終閲覧日 2019年10月15日
- 'Wie die Presse eine Bombe schärft', *Agit883* Nr.41, 20.11.1969,
 〈URL=<http://plakat.nadir.org/883/>〉 最終閲覧日 2019年10月15日
- 'Was ist Antisemitismus', *Agit883*, Nr.41 20. 11. 1969,
 〈URL=<http://plakat.nadir.org/883/>〉 最終閲覧日 2019年10月15日
- 'Der naive Anarchismus', *Agit883*, Nr.41 20. 11. 1969,
 〈URL=<http://plakat.nadir.org/883/>〉 最終閲覧日 2019年10月15日
- Kunzelmann, Dieter, 'Brief aus Amman', *Agit883*, Nr.42 27.11.1969,
 〈URL=<http://plakat.nadir.org/883/>〉 最終閲覧日 2019年10月15日
- Farkasofsky, Willi, 'Erklärung', *Agit883* Nr.50, 19.2.1970,
 〈URL=<http://plakat.nadir.org/883/>〉 最終閲覧日 2019年10月28日

- Kunzelmann, Dieter, 'Brief aus Amman', *Agit883*, Nr.55, 3. 4. 1970,
 〈URL=<http://plakat.nadir.org/883/>〉 最終閲覧日 2019 年 10 月 15 日
 'Erklärung zum Bombenattentat auf das jüdische Gemeindehaus in Berlin', SC-info, 22.11.1969
 〈URL=<http://www.trend.infopartisan.net/litlisten/aufuhr/aufuhr25.html>〉
 最終閲覧日 2019 年 10 月 15 日
- Sterling, Eleonore, 'Judenfreunde Judenfeinde. Fragwürdiger Philosemitismus in der Bundesrepublik', *Zeit*
 10. 12. 1965
 〈URL=<https://www.zeit.de/1965/50/judenfreunde-judenfeinde>〉
 最終閲覧日 2019 年 10 月 15 日
- Janßen, Karl-Heinz, 'Berlin ist nicht Jerusalem Der falsche Philosemitismus als Vergangenheitsbewältigung',
Die Zeit, 7. 7. 1967,
 〈URL=<http://www.zeit.de/1967/27/berlin-ist-nicht-jerusalem>〉
 最終閲覧日 2019 年 10 月 28 日
- Andresen, Knud./Mohr, Markus./Rübner, Hartmut, *Agit883: Bewegung, Revolte, Underground in Westberlin 1969–1972*, Berlin, 2006
- Enzensberger, Ulrich, *Die Jahre der Kommune I: Berlin 1967–69*, Köln, 2004, pp. 341–351
- Fichter, Tilman P./Lönnendonker, Siegfward, *Geschichte des SDS: Der Sozialistische Deutsche Studentenbund 1946–1970*, Bielefeld, 2017
- Hafez, Kai, *Die politische Dimension der Auslandsberichterstattung Band 2: Das Nahost-und Islambild der deutschen überregionalen Presse*, Baden-Baden, 2002
- Hurf, Jeffrey, *Undeclared Wars with Israel: East Germany and the West German Far Left*, 1967–1989, New York, 2016
- Kloke, Martin W., *Israel und die deutsche Linke: zur Geschichte eines schwierigen Verhältnisses*, Frankfurt am Main, 1990
- Kraushaar, Wolfgang, *Die Bombe im jüdischen Gemeindehaus*, Hamburg, 2005
- Reimann, Aribert, *Dieter Kunzelmann: Avantgardist, Protestler, Radikaler*, Göttingen, 2009
- Reimann, Aribert, 'Letters from Amman: Dieter Kunzelmann and the Origins of German Anti-Zionism during the Late 1960s', in Ingrid Gilcher-Holtey (ed.), *A Revolution of Perception? Consequences and Echoes of 1968*, New York, 2014, pp. 69–88
- Stein, Timo, *Zwischen Antisemitismus und Israelkritik: Antizionismus in der deutschen Linken*, Wiesbaden, 2011
- 石田勇治『『過去の克服』と反ユダヤ主義』梶村太郎他著『ジャーナリズムと歴史認識』凱風社、1999年、290–309 頁
- 井関正久『戦後ドイツの抗議運動——「成熟した市民社会」への模索』岩波書店、2016 年
- 井関正久「西ドイツにおける抗議運動と暴力——『68 年運動』と左翼テロリズムの関係をを中心に」『日本比較政治学会年報』第 9 号、2007 年、177–197 頁
- 板橋拓己「ドイツとイスラエルの「和解」——道義と権力政治のはざままで——」『アジア太平洋研究』39 号、2014 年、111–127 頁
- 川崎聡史、「社会主義ドイツ学生同盟 (SDS) の対米認識の変容——1960 年代の西ベルリンを中心に——」、『ヨーロッパ研究』(17) 2017 年、17–28 頁

高橋秀寿、「五〇年代～七〇年代の西ドイツにおける反ユダヤ主義 — その克服？」『立命館文学』661号、2019年、624-632頁

武井彩佳『戦後ドイツのユダヤ人』白水社、2005年

武井彩佳「『つぐない』のレアールポリティーク — ドイツの補償とイスラエル」『想起の文化とグローバル市民社会』勉誠出版、2016年、253-256頁

西田慎「西ドイツの毛沢東主義新左翼 — Kグループを例に」、楊海英『中国が世界を動かした「1968」』、藤原書店、2019年、231-276頁